

身近なまちの風景物語(8)

め
愛でる道

旅先で早朝、宿のまわりを散歩する。穏やかな朝靄の中を歩いていると、ゴミや落ち葉を掃き清めている住まい手を見かける時がある。

自宅の庭、庭先の道、そして向かいの家の前、隣家の前へとほうきの穂先が移っていく。誰かの指示でもなく、義務でもない。そこで暮らす人たちが住まいの環境を自発的に身繕いしている。

道は、誰もが等しく通ることができる。また等しく利用することができる。道は「公」の空間であり、「共」の空間でもある。みんながその環境を等しく享受することができる。

だからこそ、道の姿に住まい手の意識が表れる。

ゴミ一つ落ちていない道を歩くと、清々しい空気に包まれる。軽やかな歩のリズムを刻むことができる。住まい手たちの、まちに住むことへの意思を感じる。

道端の花壇にもその意思が表れる。

デコボコした土だけが露出している花壇を見ることがある。枯れたママの苗が横たわる花壇も見かけた。

道路を管理している行政では、花壇の管理まで手が

回らない。そうした花壇の脇を通ると、作り手側の意図が空振りしているようで、寂しい。

花壇は日々の手入れが必要である。苗の植え替え、雑草取りや水やりなど、手間がかかる。

道端の花壇をまちで受け入れるためには、住まい手たちの、商店街であれば商店主たちの共通した意思と行動が不可欠である。

立派な花々がいつも咲き誇ることが求められているわけではない。どういう人たちが手入れをしているのかな、季節に応じてどういう花のアレンジを目指しているのかな、と想像させてくれるだけで良い。

見放されていない花壇の存在がまちの息吹を感じさせてくれる。

アスファルトの隙間から顔を出す雑草にも生命が宿るように、まちで目にする道に住まい手たちの息づかいが表れる。まちに住まうという共有された意思に共感を覚える。

野中 勝利

筑波大学芸術系教授・芸術専門学群長



挿絵：久田琳佳子（筑波大学芸術専門学群3年）